

〈連載〉

徒然文生噺

イラスト：山本悠、構成：服部円

第四段 「時代を捉える」

『文化と生物』というお題をもとに有識者が徒然なるままに寄稿する本連載。

今回は京都大学文学研究科研究員でジャック・デリダの哲学を専門とする批評家・森脇透青さんに寄稿してもらった。

哲学と科学について

森脇透青（批評家）

哲学と科学の関わりには大きく分けて三つある。(1)「科学になる」哲学。それは論理学や心理学の成果を踏まえ、哲学それ自体に厳密なエビデンスの様式を導入しようとする思考であり、分析哲学と呼ばれる分野はこれに該当する。(2)「科学を基礎づける」哲学。それは科学に基礎を提供しようとする哲学であり、いわゆる「大陸的」な超越論的哲学である(デカルトやカントやフッサール、『存在と時間』の時期のハイデガーがそれに相当する)。そして(3)「科学の他者である」哲学。抽象的であるが、科学を一種の「他者」として扱いつつ、そこからイメージと発想を組み上げ、別様の思考を組み立てる営み。

私は、いわゆるポスト・モダンの哲学にはこの(3)の側面があったと考えている。それは、科学を欠いた思弁とみなされがちである。それは半分正しいが半分正しくない。ラカンにせよドゥルーズにせよデリダにせよ、テキストを読めば、そこに数学、化学、生物学、人類学、サイバネティクスの語彙が用いられていることがわかる。問題は、科学から新たな語彙系を取り入れ、イメージの水準に転送し変形させ、概念を錬成して別

の文脈に接続することだった。科学の一分野に下ることもなく、かといって科学を基礎づける諸学の王として威張るでもなく、科学の隣に異質な他者として居座り、その距離において「ともに考える」ことだ。

おそらくそのような営みの最後のものとして、デリダの弟子であったカトリーヌ・マラブーの仕事が挙げることができる。マラブーはヘーゲル研究から出発し、その仕事を脳科学や神経科学と結びつけている。彼女が行ったのは実証的な仕事ではなく、哲学的な「基礎づけ」ではなく、しかしたんにヘーゲルから脳科学を考えることもなかった。彼女はヘーゲルから取り出した「可塑性」という独特の概念を、「脳セルヴォー」の「脳性セブレラリティ」に結びつけつつ発展させたのである。

「性セックス」だけでなく「性性セクシュアリティ」を考えることができるように、「～性(-ty)」を考えることができる。その抽象的な具体性こそが哲学の自由さなのである。ところで、マラブーが脳について語ったのは「脳ブーム」の時期であり、日本においてもアハ体験とか、「美脳」(伊東四郎がモヤっとボールによる受難を受ける番

組「脳内エステ IQ サプリ」) が流行っていた時期である。要するにマラブーにせよ、ポストモダニストたちにせよ、彼ら彼女らはミーハーだったのだ。だが、いまどのようにしてミーハーであればよいのだろうか。AI について語る？ シンギュラリティについて語る？ 大事だとは思いますが、あまり気が乗らない。そこにはすでに語り尽くされた事柄ばかりがあるように見える。私が十分にミーハーでないだけなのか、それともミーハーにとって現代が絶望的な時代であるのか。哲学はいま、誰にとって他者であるべきなのだろうか。哲学はいま自由なのだろうか。

森脇透青（もりわき・とうせい）

1995 年大阪府枚方市生まれ、京都大学文学研究科研究員。批評家。専門はジャック・デリダの哲学。批評のための運動体「近代体操」主宰。文芸、音楽、建築、写真などについて執筆している。著書（共著）に『ジャック・デリダ「差延」を読む』（読書人、2023 年）、『25 年後の東浩紀』（読書人、2024 年）、『批評の歩き方』（人文書院、2024 年）、『いま批評はできるのか』（ゲンロン、2025 年）。



編集部・服部メモ

デザイナーの米山菜津子さんと、京都の Kaikado Cafe でお茶をしながら、最近観た映画や展覧会、ポッドキャストなどについて話していた。そこで米山さんさんがふと「いま批評が面白いんだよね」と口にした。そのとき名前が挙がったのが森脇さんだった。少し前に、同世代である 80 年代生まれの批評家が表舞台から去り、私たちは批評というものから自然と距離を置くようになっていた。だからこそ、森脇さんやゲンロンの周辺で生まれている批評を足がかりとした動きに興味を惹かれた。正直、彼らの語る言葉の多くが理解できないこともある。それでも、いまの時代を捉えるための確かな視点があると感じている。